

## 新しいパラリンピック

迫田時雄 TOKIO SAKODA

アンハードノートピアノパラ委員会会長

なぜ? そして何の為に障害児者はうまれるのか?

2020年の東京オリンピックの準備が鳴り物入りでにぎやかに始まった。日本が名誉あるオリンピック開催権を得たのは、今回が3回目である、という怪訝な顔をされる方もあると思うが、1936年ベルリンオリンピックの大成功に刺激され、1940年強力な招致運動の元、第12回東京オリンピック開催権を得たにもかかわらず、第2次世界戦争の為、開催不可能として返上、「幻の東京大会」といわれる。2020年の東京オリンピック、特にパラリンピックの内容には、少し手探りの感が否めないようだ。がしかし模索は大切なことだから、この機会に障害者の意義についてもう一度改めて考えてみることは、ちょうどいい機会だと思っている。

兎角世間一般には オリンピック・パラリンピックというと短絡的に「スポーツの祭典」「記録への挑戦」等への関心が行きがちになるのはやむ負えない、又世紀の大イベント、国の威信をかけて成功を目指せ、これを機会に投資の大チャンス、それに乗り遅れるなという動きも活発になっているようだ。

ただ、オリンピックが、「より早く、より高く、より強く」をモットーに単純な理解で進まれるのはわかりやすいのは理解できるところだが、ことパラリンピックに関しては、どうも健常者のオリンピックの2番煎じ、また参加呼びかけのパンフレットなどに「スポーツ参加に差しさわりの無い体力を持ち合わせていること・・・」などの文言を見るたびに、障害をお持ちの方々の真の願い、本来のあり方に対する基本的な姿勢についてもう一度慎重に考えてみたいと思う。

障害者はなんのために生まれるのだろう。

これは人類始まって以来問い続けられて来た問題だ。特に自分のおなかを痛めて生まれた我が子への何物にも代えがたい愛情、またその子を育てることになり、そのために自分の人生のスケジュールを180度転回せざるを得なくなった親の思いを考えると、単なる同情だけでは済まない問いかけとしてクローズアップされてくる。

19世紀になって、イギリスのチャールス・ダーウインの表した、「種の起源」は、それまでの「アダムとイブ」の人類起源説に強い影響を与えた。

また、産業革命による、様々な技術の発明や国際的な展開、さらに古代遺跡や考古学の発展に伴い人々の考え方も多様になってきた。

その中で

ダーウインの発表した「諸生物の起源はもともと一つであり、それが様々な生活環境の変化に対応し、さらに突然変異の繰り返しや、多様な種で対応できなかったものを削ぎ落としをくりかえした、自然淘汰の生き残りが今日なのである。」

つまり、もともと首の長いキリンがいたのではなく、少しでも高い木の葉が食べやすい首の長めの種が遺伝的に発達し生き残ったのに対し、対応できなかった種は消えていき、残ったのが今日のキリンだということだ。

人類も今では DNA の研究で解明され、人類発祥の地はアフリカの女性だということが分かっている。もちろんこのためには膨大な時間の経過があり、生き死にの繰り返し、また DNA の損傷や転写のミスが原因で突然変異が起きるのもわかっている。ただここで気になることがある。

これら表相的な変遷の流れは理解できるとして、すべての生き物に共通の愛情や絆の問題はどうなのだろう。

発掘された古代恐竜の遺跡から、親が子供を守ろうとした痕跡があると聞いた。あのアフリカの巨大象が、溝に落ちた小象をみんなで助ける映像を見たことがある。又明らかに障害を持った子ザルを、母猿がしっかりと腕に抱き、守っているシーンも見た。また、死んでしまった我が子なのに、あたかもそれを認めないかのように持ち歩く野生の猿の映像も見たことがある。

たとえ遺伝的に消えゆくとしても、お互い慈しみ合う心の動きは何だろう。皆さんはこの 19 世紀から今日まで起こった様々な事象を振り返ってみてほしい。

すべてを理解とはいかないが、大きな歴史の流れの中で起こった社会現象を冷静に分析し、肝に銘じておきたいことも多いと思われる。

医学、遺伝学、の発達が進み、又グローバルな考え方の拡大の中で「ゆりかごから墓場まで」という国としての国民の福祉のあり方の考え方、生活の質の向上を目指す民主的な考えの芽生え、さらにそれぞれの国の覇権主義、国力増強、等の問題がつつぎと噴出して来る。

特に 20 世紀初頭の第 1 次、第 2 次世界大戦は人類にかつてない悲劇をもたらし、特に 1945 年の広島、長崎の原爆投下は、「二度と繰り返しません」といいながら、人類の絶滅の恐れの予告として、人々に深刻な問題を提起するようになってきた。

放射能は人の遺伝子の破壊に迄及ぶと研究者は報告している。ダーウインの理論は遺伝学を刺激し、優生保護法や、劣性遺伝をどうするかの問題がクローズアップされてきた。

20 世紀初頭の世界の医学界をリードしていたのはまさにドイツだった。そして優生学が盛んになってきた。品種改良にはすでに、「サラブレッド」や「犬の改良」には成功していたが、もちろんその手法を人間に応用するわけにはいかない。

そこで明らかに劣性と思われるものの子孫を残さないように「断種」を認める国なども出てきた。犯罪歴の有るもの、さらに現代医学では改善は不可能だと思われる障害者の選別と処置法を考えるとところも出てきた。これに作為的に参加したのはドイツのナチだった。

第 1 次世界大戦の敗戦による過大な賠償金による国家予算の壊滅的状態に追い込まれ、餓死者が続出するほどだった。パン一個の為にトランクー一杯の札束が必要だったとたびたび聞いた。そうした困窮の中で、国民がやむなく選んだのは、台頭してきたナチズム・ヒトラーだった。ヒトラーがこの危機を

立て直そうとして、第一に掲げたのはドイツ人の「アーリア民族の血の誇り、世界で最も優秀な民族性」のアピールだった。食べるものもなくさまよい、自信を失っている国民を奮い立たせる最後の手段として、遺伝的に世界の歴史をリードしてきた民族の血を思い出させ、奮い立たせることだった。

多少強引な手法だったが選挙で第1党になり、まず最貧民層の救済、インフラの整備による就職率の改善。国民健康保険や年金制度の充実、軍需予算の集中的配分だった。やり方は多少強引だったが、これは功を奏し、なんと1~2年で国民の就職率100%を達成。高速道路の建設、産業の勃興主に軍需産業、さらに下層階級の優遇政策から、中には貯金をして海外旅行などに出かける人も出てくるまでになった。これは今でも「奇跡の復興」といわれる。第一次世界大戦の敗北で国土を削られ、国家予算の10倍くらいの賠償金、そういったマイナスの中で、数年で当時のアメリカに次いで世界第2の経済大国になってしまった。

私がお世話になったフランクフルトのおじいさんは、元「メッサーシュミット戦闘機」のパイロットだった。車で街を案内しながら「何言ってるんだい、あの頃は皆ナチだったじゃないか、それを今になって知らないなんて……」とっておられたのが印象深かった。

まさに1935年に開催された「ベルリンオリンピック」の大成功は、世界中にドイツ人の優秀さを見せつけるに十分だった。

ダーウインの学説を受けて「優生学」はさらに盛んになってきた。

優生学の狙いは、「知的に優秀な人間を創造すること」「社会的な人的資源を保護すること」「人間の苦しみや健康上の問題を軽減すること」だった。

その目的を達成する為の手段として、「産児制限」「人種改良」「遺伝子操作」され、これが強権的な国家による、「人種差別」「人権侵害」「ジェノサイド(民族殲滅作戦)」などに強い影響を与えるようになった。

ただこの危険な手法でやってはいけなかったことは、純潔なアーリア民族の血を守るとして、行った「障害者T4作戦」と「ユダヤ人殲滅作戦」だった。

限られた国家予算の配分の中で、何ら生産性を生み出さない障害者手当、ドイツ人の職場を奪うユダヤ人の廃除、

データによると1933年当時ドイツのベルリンの医者60%、ウイーンで67%がユダヤ人だったという記録がある。私が学んだウイーンムジークアカデミーでも主だった教授はほとんどがユダヤ系だったし、私の恩師ルードヴィヒ・チャツケス先生もユダヤ人で、戦争の間はトルコのイスタンブール音楽大学に避難(?)して教えていたとのことだった。

発端は当時のヒトラーの率いるナチ党員の、1父親からのヒトラーへの1通の手紙だった。当時のヒトラーは既に政権のトップにあり、あたかも神格化された存在だった。又巧みな政策手法によって国民の動向を確実に管理していた。

その手紙には「私の娘は視覚に障害がありさらに聴覚にも障害がある、加えて知的な障害をもっている、こういった子供の育成がどんなに大変か理解してほしい。」というものだった。こういった様々な訴えにこまめに対応する人だったヒトラーは、直ちに彼の主治医であったブランドに命じ直接に診断に行かせ報告させた。

そして書かれたのが「専門の医者により、可能な限り、あらゆる方法でも治癒の見込みがないと判断された障害者に「恩寵ある死」をあたえる権限を許可する。」

という、超法規による命令書を書いている。

つまり選ばれた医者の判断に任せる、それと親が少しでも罪悪感を軽減するように最終的には自分が責任を取る。という意味になる。

直ちに全国の施設に調査報告書を出させ、そして特別仕様の大型バスによる、収容が必用とされた障害児者は、フランクフルトの近くに有る「ハダマー障害者施設」に全国から集められる。

長旅なのでコーヒーやサンドイッチが配られる等、親切なサービスがあったようだ。

ところが、中には何かを感じた患者が必死に乗車を拒否するのを強引に引っ張り上げるということもあったようだ。

そしてハダマー収容所に到着したら 優しい看護師さんのお迎えが有り、カルテによる専門の医師の確認と診察があり、「それでは皆さん、お疲れでしょうから部屋に入る前にシャワーを浴びて着替えをしましょう。」と看護師がみんなの着衣を脱ぐ手伝いをし、シャワー室へ誘導した。こうして始まったのが後のホロコーストの始まりだった。

私にはこれ以上のことは書けない。

しかしこのことを知ったのは私がワイマールの近くの「ブッヘンヴァルト」という、かつてのユダヤ人強制収容所を訪れ、あまりにも残酷な情景を見たからだ。

本では読み知っていたつもりだったが、その鉄製の看板の門をくぐって、目の前に広がる 広く開墾された森の丘の斜面の向こうに残されたかつての収容所跡の、(残された数軒の今は記念館になっている)建物に入って、実際の収容者の遺物を見たときのショックは生涯忘れられないものだった。

板造りのまるで蚕棚のような3段ベッド群、手術室

ガス室跡、焼却炉、私物のカバンや髪の毛の山、などなど、足がすくむようだった。

奥まったところにある、看守の部屋の棚に置かれたガラス瓶に残された様々な標本、極め付きは当時の収容所の女看守「ブッヘンバルトの魔女」といわれた「イルゼ・コッホ」が作らせたという、テーブルに飾られた人の皮を張って作られた電気スタンドなどを目の前にしたとき、人間がここまで変容できることの恐ろしさを感じ、ぞっとしたことを覚えている。

戦争がおわって米軍がやってきてこの収容所を見て、驚き、さらにこれだけの行為が行われていたことを周りの町民が知らなかったといったとき、司令官が怒って、1週間にわたって全市民に見に来るように命令した。

参列者の中には 卒倒する人々も多かったと聞いた。

そしてこの数千年にわたって人々の偏見と差別の中に生きなければならなかった人々が現実にはいたということ、もちろん自分は 知らなかったとは言いながら、このような罪を犯してしまう人間としての性を深く深く詫び、許しを乞い祈った。

戦後、障害者T4作戦の責任者、ヒットラーの主治医ブランドは、戦争犯罪裁判で有罪になり、最後に陳述した中で、「ナチは決して障害者処分問題に関与していない、これは医学専門医の指示に従って

やったことだ。我々はただバスを準備し便宜を図っただけだ。これは戦争だったのだ。命令には誰でも絶対に従はなければならなかったのだ。」

さらにヒトラーが「T4 作戦」命令書を出すときにも、その前に盛んに、如何に障害者対策費が掛かるか、若者が国を守るために命をかけて戦っているときに、生きるに値しないものの為に貴重な国家予算をつかうのか？といった宣伝をおこなったり、戦争が始まればこのような問題は国民の関心をそらすことができると踏んでいる。

そして、この作戦は秘密裏に着々とすすめられ、20万人という障害を持つ人々が処分されることになった。

生きるに値しないという理由で。

だがこの情報を耳にして危機感を抱いた人がいた。

「ミュンスターのライオン」といわれた「クレメンス・アウグスト・フォン・ガーレン神父」といい、ドイツ貴族の家柄で、カトリックの後の枢機卿だった。

2メートル近い大男で、話しぶりは威厳があったといわれている。

障害者施設や教会関係から次々上がってくる障害者安楽死情報に怒り、1941年8月から3回にわたってナチ糾弾の大演説を行い、さすがのヒトラーもこの法律を20日間で取り下げざるを得なかった。

その要旨は次のようなものだった、

「貧しい人、病人、非生産的な人、いても当たり前だ。

私たちは他者から生産的であると認められた時だけ生きる権利があるというのか？非生産的市民を殺してもいいという原則が出来、実行されるならば、我々が年老いて弱ったとき我々も殺されるだろう。

非生産的な市民を殺してもいいとするなら、今弱者として標的にされている精神病患者だけでなく、非生産的な人、病人、傷病兵、仕事で体が不自由になったひとすべて、老いて弱ったときの私たちすべても殺すことが許されるだろう。……」

もちろん彼は司教としてドイツでも高い地位にあったから

ヒトラーや政府の高官とも交流はあった。彼の高潔な人となりも知っていたから、さすがのヒトラーも排除できなかったのだろう。

「神の子イエス様は泣いておられる」と続くこの説教文は人々の胸を打ち、一気に注目を浴びた。

彼もまた前もって用意周到に自分の原稿を政府の高官や、教会関係、パチカン関係に送りつけ、それを見た人々が一生懸命手書きで写し取り関係者に次々送りつけ、あっという間に全国に広がった。

しかしこの問題はこれで終わったわけではなかった。

1939年9月1日にドイツはポーランドに侵攻し、第2次世界大戦がはじまった。アーリア民族の血の純潔を守るとしてユダヤ人廃除の結果として600万人の強制収容所は満杯になり、大量殺戮の為に障害者処置の施設とノウハウは移行されたのは皮肉なことだった。

弱者を無視する国は弱い。災いが自分にめぐってくることを国民は知っているからだ。

そして、確かに 1945 年に第 2 次世界戦争は終わったけれども、それですべてけりが付いたわけでは決していない。それらのことは又繰り返されてもおかしくないことだ。この事実と深い悲しみは、人間の弱さの記憶として残っている。

ただ一つ救いは、様々な技術の進歩だ。前述した様に 100 年前のトップの医学博士たちが処分としか考えなかったものが、今日では治癒できるようになった。

一旦誤って切断してしまった指を、完全に元どりに接続できるドクターを知っている。ライ病や結核なども、前世の祟りでもなんでもなかったじゃないか。

凄いのは IPS 細胞の研究だ。

今日では失われた機能でも遺伝子医学のおかげで、臓器の再生も可能だという。不思議なことだ。

こういう下地を残していただいた天に感謝しよう。

DNA の技術で自身の出自の歴史をしらべることができる。先のテレビ番組で DNA によるデータの報告に、自分が最も偏見を持っていた人種の血が先祖に混在しているデータを知らされ、ショックを受けている人の番組を見たことがある。

もう一息なのだ。

しかしそれでも障害者は生まれる。

私はここで、私の今日までの音楽人生を振り返って、なんと多くのユダヤ人の恩師のお世話になったことか。

そしてこの人たちの、数千年にわたるつらい運命を生き延びるために、どのように生きて来られたかの実例をまさに沢山見てきた。

この方々の鉄則は、生き延びるためにはその社会に同化し、己を磨き、人より抜きん出た存在になること。

それはそれは大変な努力だったろうと思う。

それを、生き延びるために選んだ音楽や芸術の道は、正攻法だった。

今では音楽家の中で 95% はユダヤ系の名手だ。いや、そうでない人を探すのが大変だ。

あの 19 世紀から 20 世紀初頭にかけてのピアノの教授として有名な「テオドール・レシェティツキー」の弟子を取る条件は「君はユダヤ人かね？」というのが常だった。その教えを受けたシュナーベルも、その門下の私の恩師チャチケス教授、レオニード。コハンスキー先生もそうだった。

そうした背水の陣を控えた中にこそ 神業を生み出した秘密がある。

そしてヒントとしてこの人たちは語学も含めて、必ず国際的視線をわすれていない。それは、いったん何かがあれば横の連携を頼りに助け合い、移動する可能性を残しておくこと。

同じ差別を受けやすい人々の共通点として、このことは範として見習うべきだろう。

私は指導者として才能ある障害の方々とかかわる中で、これらの方々の抱える問題点を見てきた。

そしてこの人たちの自立の道として私が提唱したのが「ピアノパラリンピック」運動だった。これにはまず

- ① 目標と進路を示すこと。
- ② 秀でた能力は いわれなき差別をはねのけることが出来る。
- ③ 自立生活の可能性が見えてくる。

これらを基本に

1. 障害があるからとピアノをあきらめていませんか？私たちはあなたのピアノ学習のお手伝いをします。
2. 偏見を改め、人権の尊重、障害者の芸術活動支援法をもとに活動の充実を図る。
3. ピアノパラリンピックの国際的展開と普及。

この運動に努め、2005年を横浜でスタートし、2009年カナダ・バンクーバー、2013年、ウイーン大会を成功させ、この10数年国内および世界各国の障害ピアニストのネットワーク造りに励み現在25カ国以上の仲間と連携を深めている。そしてピアノを通して表現される「不可能を可能にする」人たちの信じられない想像できない技術と、そこから醸し出される、情熱に多くの人々に深い感動そして励みを与えてきた。

前述のように20世紀初頭に起こった障害をお持ちの方々の事件は、当時の超大国で起こったことで、世界をリードする文化国家で起こったことだ。

国家として運営にかかわる為政者の、そして民衆の本音、浅はかさがあらわれた悲劇だった。

オリンピック、パラリンピックは、世界40数億の人々が注目しているのだ。その中でパラリンピックこそ障害者の本当の価値と実力、存在の意味をしっかりと提示する最高のチャンスでなければならない。パラリンピックはスポーツの楽しみだけに終わらず、真に21世紀の人の正しいモラルの確立のために、障害児者みんながそれぞれの持てる可能性を表現し、存在感を示すステージで有るべきだ。

前人未踏の新記録作りも大切だ、だがその時だけで終わるのではなく、障害者の個性的な可能性の記録、そしてその記憶は、これから生まれる障害児者、そしていずれ動けなくなる私たちの心の支えになってほしい。

「体力のある人だけ」とか「スポーツができる人だけ」？—それが出来ない人だから障害者といわれるのではないかな？

彼は「役立たず」と言った、それとおなじことではないかな？

人の持つ「不屈の魂」、まさに生きた証としての芸術のプログラムこそふさわしいといえる。古代のオリンピックには無かった新しいプログラム、それをどう今後人類の遺産として残していくかは、今日の私たちの願いにかかっている。

2018年2月。

ここで一つお願いがあります。

一度ぜひこのピアノパラリンピックで育ったピアニストの演奏を聞いてください。  
ただその時は、静かに目を閉じて、心を空にして聴いてください。そこには「障害」もなく、  
「健常体、五体満足」も超えた美しい音の世界をお聞きになれるでしょう。

2018年2月24日

迫田時雄

アンハードノートピアノパラ委員会会長

UNHEARD NOTES Piano Para COMMITTEE

<http://www.cipfd.com/jpn/index.html>

e-mail: [tokiosakoda@nifty.com](mailto:tokiosakoda@nifty.com)